

第3に面会回数が多い患者では少ない患者よりも Score は高い傾向がみられた。

以上のことを治療的観点から考えると、患者の精神発育、すなわち安定した情動、コミュニケーションの拡大、生活意欲の維持のためには、1) 母親との情緒的交流が密接に保たれている必要があり、母親の甘やかし、受容、共感的態度が必要であり、理性的な態度は望ましくないこと  
2) 施設への入所は10才に至るまでは望ましくないことが云えよう。これが中間的結論であるが今後更に症例を増し検討が必要であろう。

さらに生化学的立場から筋蛋白の代謝動態に関する研究も行なったが、予備的段階であり、来年度の研究テーマとして追加したい。

## 30 PMD high stage 者の主体的 集団活動における側面的援助の一考察

国立療養所医王病院

正 木 不二磨

### 〔はじめに〕

行動する事と、その結果の受容、即ち経験における二面的結合が、療育の場において、ともすれば軽んじられやすい、ことに high stage 者においては、後者のみ重視され、身体的活動と精神的活動を機械的に分離し、後者に訴える傾向がある。しかし、我々は、成す事によって学ぶ、即ち集団活動を展開させる事によって自ずから、受容場面においても、その差が理解、知識、思考の深さとなって異なってきた、主体的関与度とも関連してくるものと思われ、S50年度の班会議にて、「器楽訓練による意識の変容について」と題し、後者の必要性についての考察を行なった。今年、5年を経た今日の high stage 者について、考察を行なう。

### 〔研究の目的〕

趣味の狭少に加え、進行に伴う障壁の累積は、各人がその過程において内在しており、加えて集団活動場面において high stage 者は、援助なくしてそのギャップを埋める事ができず、主体的関与度とも関連する。長期展望に立脚し、たとえ Bed patient に至っても、主体的に関与可能であろうと推察される集団活動の援助をとうして（能力減損が、即障害とならない為の）今一度、PMDの療育について考えてみたい。

### 〔実践過程の概略〕

5年前、当時Dタイプ中卒生8名を対象に、楽器の導入を試みる。開始当時は器楽訓練として訓練時間帯に位置づけし、週2回練習を行った。以後、毎春、中卒生全員を対象に、演奏活動を試みる。S51・52年度より訪問教育が開始されるも、卒業生の強い要望により、週4回、訓練とは別に40分、器楽にとりくんでいる。その間指導者は、保母を中心に、訪問教師も含めて年度毎に異なるも、現在まで表1に示す如く、彼らに十分受け入れられており、今まで1名の落伍者もせず、時には15名を有する事もあった。又、近年、作詩、作曲への意欲も内発され、具体化されてもいる。又、野球においても4年前より1年間の継続指導によってグループ化がなされ、年々主体性を滞り、自発的に運営され、参加人員も多くなり、表2の如く、共に中卒生の余暇活動の重要な一翼をにない、表3にみられるように、年齢及び障害度も高くなってきている。今まで行って来た留意点として、1.日課における時間の確保と場の設定。2.継続指導とリーダーの育成。3.自主運営の為の各種の配慮。4.各人の機能状態に即したハンディ克服の為の工夫と実践である。

表1

・音楽についての分野別年変化（質問紙法）

分野 年	演奏する事		きくこと		歌うこと	
	S53・1	S50・10平均	S53・1	S50・10平均	S53・1	S50・10平均
すき	71.4%	59.5%	100%	83.5%	28.6%	25.0%
どちらでも	21.4%	29.0%		16.5%	42.9%	34.5%
嫌い	7.1%	11.0%		0%	28.6%	40.5%

（S50・10平均値は、当時の卒業生8名と中学2.3年生9名を対象に行なった資料に基づく）

・野球について

	みたり、聴いたりすること	自分がすること
すき	64.3%	50.0%
どちらでも	35.7%	28.6%
嫌い		21.4%

表2

・趣味及び楽しいと感ずる時の調査より

S53・1 N = 14

音楽と野球の両方選択	57.1%	← 85.7%
音楽のみ選択	28.6%	
野球のみ選択	7.1%	
音楽と野球の両方非選択	7.1%	

表3

中学卒業生の年齢構成

S53・1末現在満年齢

年 令	15才	16才	17才	20才	22才	24才	25才	
人員数	1	3	4	3	1	1	1	14名

障 害 度 表 (8段階分類)

障害度 stage	5度	6度	7度	8度	計
人 員 数	2		10	2	14名

## 〔結果・考察〕

強制しないことを前提に、彼らの意欲ある限りにおいて、第4項について今まで改良を行って来た(写真参照)従って、今後さらに改良工夫する事によって彼らの活動に於ける場所的、時間的、内容的、身体的、各種ハンディを緩和すると共に、それらは、指導者(介助も兼ねる)の負担軽減にもなり、より充実したものとなる。表4-1にみられる如く、他教科の短期間変化の中にあつて、器楽は彼らを中心に学校、病院、各職員の理解を基に、今日まで継続され、その結果が現われているものとみられるが、逆に、教科別 high stage 者の教育についても考える必要のある事を表4-1における半年後の変化と、表4-2との関係において推察されるであろう。さらに本年度、高等部設立に伴ない、一貫した教育内容によって、さらに個々に合った各分野での配慮工夫が人的、物的環境と共に求められる。

表4-1

楽しい教科調査 (S・52・6とS・53・1との比較)

％は支持率を表わす N = 15    N = 14    ※教科別時間によつても異なる。

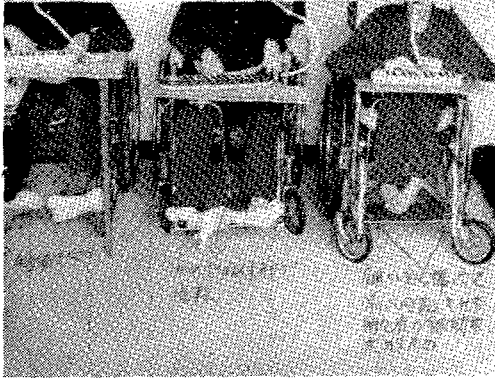
年月 \ 教科名	理科	器楽	クラブ	美術	数学	社会	英語	国語	保健体育	職能
S・52・6	100%	67%	67	67	67	40	27	20	40	0
S・53・1	57.1%	71.4	42.9	7.1	0	0	7.1	7.1	0	7.1

表4-2

自分にとって大切だ、必要だと思われる教科(支持率順に)    N = 15    S52・6調べ

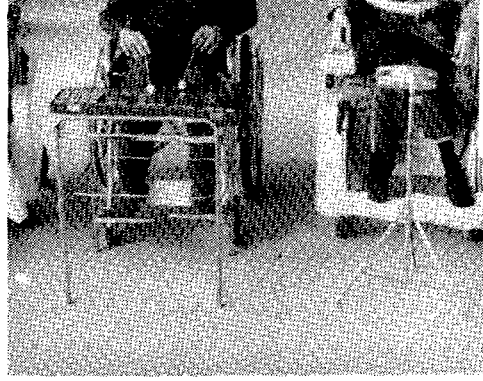
国語	73%	数学	73%	社会	60%	理 科	53%	保健体育	47%
美術	20%	器楽	20%	英語	13%	ク ラ ブ	7%	職 能	7%

ピアノ置台 (平素は折りたたみ重ねて置くのでスペースを取らず移動も可能である。高さが一定でない為、各人の機能に合わせて作製する)



グロッチン置台

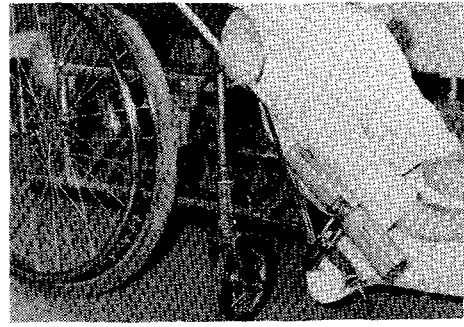
タンバリン置台  
排尿回数が多い為と休憩をとるため



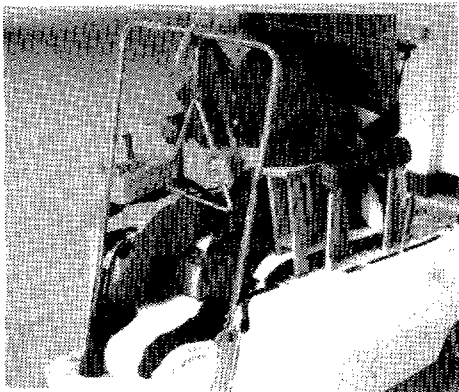
ウッドブロック (左ブレーキレバー附近より取りはずし可。高さの調整可。取りつけたままで移動可。)



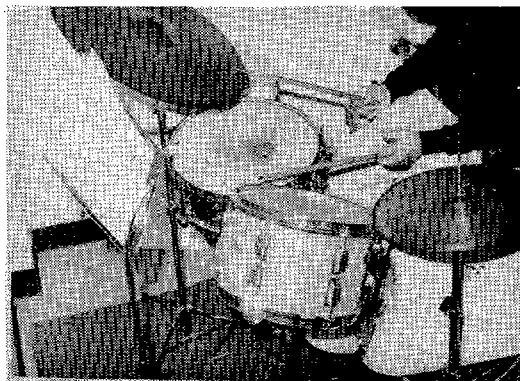
ウッドブロック (右手に著しい制約がありブレーキレバーをテコにする。移動可。)



トライアングル (手で支える事不可能であり、  
体を必要でない時、取りつ  
たまま傾斜して休む為、移  
動可。



ド ラ ム (長方形の空箱にヒモをつ  
け、テーブルクロスを張  
り、手首の固定をする。  
(本人の考察)  
手の伸びに限度がある為  
に並べる場合(演奏の時)  
に時間を要する為、残さ  
れた課題でもある。



楽譜勉強の為のスナップ (器楽参加メンバー)

(前後に於ける介助に人を要し、又場  
所も必要である。  
高さの調整が困難で機能は発揮され  
ない。)



野球用具入れ (ベース、バット、タモ  
ボール入れ)  
自分達で移動させ使用  
する。



↓  
**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります  
↓

〔はじめに〕

行動する事と、その結果の受容、即ち経験における二面的結合が、療育の場において、ともすれば軽んじられやすい、ことに high stage 者においては、後者のみ重視され、身体的活動と精神的活動を機械的に分離し、後者に訴える傾向がある。しかし、我々は、成す事によって学ぶ、即ち集団活動を展開させる事によって自ずから、受容場面においても、その差が理解、知識、思考の深さとなって異なってきた、主体的関与度とも関連してくるものと思われ、S50 年度の班会議にて、「器楽訓練による意識の変容について」と題し、後者の必要性についての考察を行なった。今年は、5 年を経た今日の high stage 者について、考察を行なう。